

平成22年度宮古群島病害虫発生予報第4号(7月予報)

7月の気象予報

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	気 温	降 水 量	日 照 時 間
高い(多い)	50	30	30
平 年 並	30	30	40
低い(少ない)	20	40	30

(平成22年6月25日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

平年値

	平均気温()	最高気温()	最低気温()	降水量(mm)	日照時間(h)
宮古群島(宮古島)	28.5	31.4	26.2	137.9	246.7

(沖縄気象台発表・統計期間1971～2000・資料年数30年)

7月の発生予報および防除上の注意事項

1 さとうきび

アオドウガネの防除対策

- a 6月の予察灯への日当たり誘殺成虫数は、14.6頭(前年13.3頭、平年28.7頭)と、やや少なかった。
- b 5～7月は成虫の発生時期にあたり、特に6月下旬から7月上旬は成虫の発生ピークであることから、誘殺灯の保全・管理を徹底する。
- c 6～7月は幼虫の防除適期(1～2齢期)にあたるので、例年被害の多い地域では防除適期を逸しないように薬剤を施用する。

メイチュウ類の防除対策

- a 6月上旬の調査の結果、春植における芯枯茎率は0.4%(前年5.1%、平年3.8%)とやや少なかった。
- b 6月のカンシャシンクイハマキ合成性フェロモントラップによる日当たりトラップ当たりの誘殺数は22.4頭(前年52.5頭、平年32.5頭)と平年並であった。
- c 加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、食入初期の防除に重点をおく。

野その防除対策

- a 6月上旬の調査の結果、夏植における被害茎率は0%(前年0.1%未満)であった。
- b 宮古島市に、一部の農家から被害の報告が届いている。
- c 雑草が繁茂した環境を好むことから、除草を行う。
- d 剥葉残渣などの野積みに巣を作ることから、野積みを行わない(池間島など)。
- e 被害の多い地域では、薬剤による一斉防除を行う。

2 マンゴー

収穫後の病害虫防除対策

- a 6月中下旬の調査の結果、チャノキイロアザミウマの葉当たり虫数は0.2頭(前年7.4頭、平年2.1頭)とやや少なく、ハダニ類の葉当たり虫数は0.6頭(前年1.4頭)であった。また、一部の施設で炭疽病、コシロモンドクガ、カイガラムシ類の発生が見られた。
- b 収穫後に着果枝・未着果枝を切り返して発生する新梢は、次年度の結果母枝となる。充実した健全な結果母枝とするためには、徹底した病害虫防除が重要である。
- c アザミウマ類、ハダニ類やカイガラムシ類などの微小害虫は一般的に風雨に弱いことから、樹勢回復も兼ねて、早めに被覆ビニールを取り除く。
- d 灌水を行う際、噴霧機などで微小害虫を洗い流すように散水し、密度低減を図る。
- e 新梢の発生をそろえることで、アザミウマ類防除の効果が高くなることから、施設ごとに剪定を同時期に行う。
- f 剪定を行った後の残渣は、病害虫の発生源となるため、速やかに施設外に持ち出し処分する。